

駅伝を通して見た大学スポーツの現状と課題

佐川和則

1. はじめに

わが国では、明治以来の帝国大学を中心とする大学が、欧米からの輸入文化としてのスポーツの受け入れ口となってきたこともあり、スポーツは学校で奨励、発展してきた。大学の運動部は長い間わが国のアマチュア競技スポーツの担い手であり、初期の駅伝競走において替え玉走者を出場させたり、昭和初期の野球早慶戦で応援団が衝突したりといった、牧歌的な非スポーツマンシップ問題や不祥事はあったものの（友添 2006）、おおむね健全な団体として認知されてきたと私は思う。高度経済成長期にはいり、一部のスポーツでは、企業がそのイメージ戦略のために専属チームや選手を抱え競技力向上に努めたことから、わが国のアマチュアスポーツの最高峰は企業スポーツである時代が続いた。その後、アマチュアとプロとの垣根が低くなり、オリンピックにプロ選手が出場できるようにもなった。またバブル経済の崩壊により企業スポーツチームの休廃部が続き、日本型トップアスリート養成システムが危機をむかえつつある。文部科学省は総合型地域スポーツクラブの育成に力を注ぎスポーツの土壌を地域に移そうとしているものの、その将来はいまだ不透明である。今日、私には大学スポーツが再び脚光を浴びつつあるように思える。

一方、わが国は、少子化が進み 18 歳人口は減少を続け、2007 年には大学全入の時代を迎えるという。しかし受験戦争はなくなり、魅力のない大学・短大は定員割れから廃校を余儀なくされることが予想されている。このような状況で、大学は経営戦略としてスポーツの利用を考えるのは自然な流れであろう。しかしこのようにして再構築されつつある大学課外スポーツは、いまさま

ざまな問題を提起してきている。筆者は大学で教鞭をとる傍ら体育会陸上競技部のコーチとして駅伝・中長距離の指導をしている。関西の大学なので東京箱根間往復大学駅伝競走（以下：箱根駅伝）の大渦に飲み込まれることは免れている。編集委員会から執筆要請をいただいたこの機会に、私は駅伝競技を通して、現在の大学スポーツを取り巻く状況をいささか冷静に考えてみた。本稿では、まず①駅伝競技（特に箱根駅伝）が陸上競技界におよぼす影響について述べ、つづいて②スポーツ留学生とスポーツ特待生の大学生としてのいくつかの問題について考察する。

2. 駅伝が陸上競技界に及ぼす影響

1) 一極集中

昨今の箱根駅伝の加熱ぶりは異常である。1987 年の日本テレビの中継開始以来、視聴率は増え続け、2003 年には 30% を突破した。2007 年の箱根駅伝の瞬間最高視聴率は 33.7% (2007 年 1 月 4 日読売新聞) であったという。それまで正月の学生スポーツといえばラグビーだったが、視聴率を目安にみれば、現在では箱根駅伝が大きく上回っている。正月の本選だけでなく、11 月の予選会のところからいくつかの特別番組がくまれ、新聞、雑誌、インターネット等のメディアへの露出が多くなる。当日の沿道の観衆は片道だけでも 50 万人を数えるという。

高校生アスリートは箱根を走ることを目標に関東の大学に進学したいと考えるのは当然のことだろう。いま関東圏で箱根駅伝出場をめざして強化している大学は 30 校ほどあるという。1 校で 10 名ほどの高校生選手をスポーツ推薦制度などで入学させれば、その数は 300 名ほどになる。この数

は、各都道府県の高校総体陸上競技 5000m の入賞者合計数とほぼ同じである。そして実際にこのほとんどの高校生ランナーが関東の大学に進学している現状がある。そのため地方の大学の駅伝チームと関東の大学のチームとの実力差は拡大している。2006年の全日本大学駅伝対校選手権大会（以下、全日本大学駅伝）における関東以外の大学の成績は、3人の外国人留学生を擁した第一工業大学の、出場 25 校中（東海学連選抜を除く）9位が最高であり、それ以降は立命館大学（第14位）、京都産業大学（第16位）と続く。

一極集中の状況は、このような地域的格差を生むという水平的問題にとどまらない。それは陸上競技種目間の一極集中という垂直的問題である。関東の大学の多くは駅伝を走るための選手をスポーツ推薦制度等で入学させるケースが多いため、高校生ランナーで中距離種目に適性をもつ者も長距離種目での好記録をねらって、そのためのトレーニングに集中する傾向があるという（生島 2005）。この垂直的一極集中は入学してからも変わらず、後述するようにナチュラル・ディスタンス（おのおのの選手にあった距離特性）を犠牲にしてまで箱根駅伝に没入するという事態は、日本陸上競技界に歪みを生じさせていると指摘できる。

2) 箱根ディスタンス

箱根駅伝の総距離は、217.9km、これを10人で走るから、平均 21.8km となる。また、最長の区間は 4 区の 18.5km、最長の区間は 5 区の 23.4km である。これらの距離は、トラックレースの走距離（普通、最長は 10000m）と比べて長く、しかしながら箱根駅伝をめざすものなら誰もがこなせないといけない距離という意味で、〈箱根ディスタンス〉と呼ばれる。

〈箱根ディスタンス〉を走る場合の運動強度は、最大酸素摂取量（ $\dot{V}O_2\max$ ）の 86-88% と推定される（Daniels 1998）。この強度は OBLA (onset of blood lactate accumulation) 強度といわれ、血中乳酸濃度が 4 ミリモル/l 程度の運動強度であり、この強度（ランニング速度）を超えると、血

中乳酸は急激に増大し、運動を継続することができなくなる。エリートランナーは 10 マイルからハーフマラソンの距離をこの強度で走る。箱根駅伝の 21.8km という距離は OBLA 強度を維持できるギリギリの距離なのである。全日本大学駅伝の区間平均距離は 13.6km であるから、OBLA 強度で走っても余裕がある。したがって、箱根駅伝のようなさまざまなアクシデントが起こることは極端に少ない。箱根駅伝を走ってふらふらになりながらタスキをわたす姿は、観ているものにハラハラドキドキの感情と感動を与えるが、走者は心身に強度の負担を強いられていることを、関係者は今一度真剣に考えてみる必要があろう。

さらに〈箱根ディスタンス〉を走るためのトレーニングは、一定のペースで 10km を 2 本とか 20km を 1 本とかの、いわゆるペース走が多くなる。ほぼ最大酸素摂取量の強度（100% $\dot{V}O_2\max$ ）で走るインターバル・トレーニングも行うが、トラック種目専門のランナーに比べれば全トレーニングに占めるその割合は少ない。このためナチュラル・ディスタンスが 1500m や 5000m のランナーも〈箱根ディスタンス〉を走るための強度の低いトレーニングを繰り返すことになり、トラック種目の記録停滞を招くと指摘する人もいる。事実、2006年12月現在 800m から 10000m の男子日本記録の世界記録に対する割合は約 95% であるのに対し、20km、ハーフマラソン、マラソンのそれは、それぞれ 97.2%、97.4%、98.9% と、トラック種目に対してロード種目の記録が高いレベルにある。ちなみに 30km の世界記録は、2005年に松宮隆行（コニカミノルタ）が熊本で記録した 1 時間 28 分 00 秒である。現在の長距離トラック種目は、ケニアやエチオピアなどのアフリカ勢が台頭し、世界記録をさらに高いレベルに押し上げているから、箱根駅伝だけを日本男子長距離陣の低迷の原因とはいえないが、選手の至適な距離特性が活きるよう箱根駅伝の区間距離を変更してより短い距離を設定するなどの工夫が必要だろう。

〈箱根ディスタンス〉は、その競技特性からいえば、トラック種目よりはマラソンに近い。した

がって、多くの若いランナーが箱根駅伝を目指してトレーニングすることは、日本のマラソン界にとっても望ましいことのように思える。しかし、男子マラソンの現日本記録は2002年10月に高岡寿成（カネボウ）がシカゴマラソンで記録した2時間06分16秒であるが、ここ4年ほどは日本記録が更新されることはなく、国際大会でのメダルは、1992年のバルセロナ・オリンピックでの森下広一（旭化成：銀メダル）以来獲得していない。確かに日本の男子マラソンは、1980年代の宗兄弟、瀬古利彦、中山竹通などの世界的ランナーがしのぎを削っていた時代と比べると力を落としている感が強い。生島淳は、このようなマラソン界の状況を著書『駅伝がマラソンをだめにした』（2005）の中で、実業団チームの存続危機に加え、多くの大学生ランナーが駅伝を競技生活最大の目標と位置づけるため、大学で燃えつきてしまい、卒業後に競技を続ける大学生が減ったことをその原因の一つとして指摘している。

3. 留学生・特待生問題

1) 留学生出場枠

箱根駅伝に留学生ランナーがはじめて登場したのは1989年のジョセフ・オツオリ（山梨学院大学）である。山梨学院大学はその後ステファン・マヤカを擁し、1992年に箱根駅伝初優勝をとげている。以来、留学生ランナーは高校のチームにも在籍するようになり、全国高校駅伝競走大会の花の1区（10km）は、毎年のように留学生選手の前頭集団のあとを日本人選手の第2集団がつづく光景を目にするようになった。実業団チームのほとんどにも外国人ランナーが在籍するようになり、日本人選手だけからなるチームは珍しくなった。2007年元日に行われた全日本実業団ニューイヤー駅伝では、中国電力と旭化成に外国人選手がひとりもいないにもかかわらず、それぞれ1位と2位になったことが逆に話題となった。

関東学生陸上競技連盟が箱根駅伝に出場する外国人留学生の出場枠を各チーム1名と決めたのは2003年である。箱根以外の大学駅伝では、びわ

こ大学駅伝が同じく留学生の出場人数を各チーム1名としているが、大会規則としてそれを制限しない競技会（出雲全日本大学駅伝選抜駅伝競走、全日本大学駅伝など）も存在する。

では、大学駅伝に外国人選手の参加を制限する理由とはいかなるものであろうか。この理由でもっとも多いのは、外国人競技者が強すぎて不公平を招いているというものである。すべての外国人選手が日本人大学生レベルを超えた競技水準を持っているわけではないが、その中の数人は、確かに日本人トップの実力を上回っている場合が多い。しかし、すべての留学生の参加を排除することは、グローバル化を標榜する大学にあっては考慮の対象にはならないし、競技レベルで外国人選手を区別し参加の可否を決定することもできないので、〈外国人競技者は1名以内とする〉などといった日本的中庸規則がつくられるのだと考える。

しかし、特別に強い選手を勧誘しチームの競技力をあげるという発想は、日本人特待生選手についても同様である。留学生選手のいないチームが留学生競技者のいるチームに対し不公平感をもつことは、スポーツ推薦制度をもたない大学チームがその制度を有する大学チームに抱く感情と異なるものではない。大学の駅伝チームが、大学のイメージ強化のための媒体として強化の対象となり続け、それゆえにスポーツ推薦制度の存在が廃棄されない以上、この問題はなくならないだろう。私はむしろ留学生の競技会への参加制限を撤廃し、国籍や人種に関係なく誰でも参加できるようにすることが、駅伝競技の公平性を保つひとつの方法であると考えている。

2) 学力問題

留学生・特待生に関するもうひとつの問題は、かれらの学力である。スポーツ留学生の学力がその相対的に低い日本語能力ゆえに一般学生に少々劣るのは理解できるが、勝利者インタビュー時に通訳を必要とするとなると論外である。日本人特待生にしても、多くの大学のスポーツ推薦入試では、学力試験が免除される場合が多く、かれらの

ほとんどは受験戦争とは無縁に進学することができる。入学後も毎日の厳しいトレーニングに時間をとられ、大部分のスポーツ学生は学生の本分である勉強にさく時間は、一般学生と比べて極端に少ないと予想される。2007年の箱根駅伝に出場した大学の指導者のうち、実業団での競技経験者でないものはほんの数名である。今日の駅伝競技のトレーニングには実業団の競技力向上のノウハウが持ち込まれている。それは量的な裏づけをもったトレーニングシステムであり、一日数回からなるトレーニングが、勉強や自分と異なる考え方をもつ人々と触れ合う時間(特に学生時代にはかかせないと私は考える)などを奪い取っている。それでもレギュラーとなり大会に出場できる学生は、競技者としての当然の犠牲にあり余るほどの栄誉と達成感を得ることができよう。しかしピラミッド型を典型とするスポーツ組織にあっては、対校戦にすら出場できない多くのスポーツ学生が、明日の成功に一縷の望みを抱きつつ下積みのまま数年の学生生活を送るのである。自分の限界に気づき学業の道に専念しようとしたときに、そのような学生を積極的に受け入れる教育支援システムの構築が望まれよう。

日本のスポーツ学生の学業成績が一般学生と比べて劣るといふ客観的統計は公表されていないようであるが、米国のNCAA(National Collegiate Athletic Association)第1部Aに所属する大学のスポーツ学生の学業成績と卒業率は、一般学生と比較して悪いという(D・ボック 2004、岡本 2006)。この状況の背景には、スポーツ学生の学業への甘えと、大学のスポーツ学生への教育支援システムの不備の両面があると考えられる。しかしながら、玉木(2006)の「学生の本分はスポーツではなく、勉強のはずだ。この単純にして最も大切な基本的一件事が蔑ろにされている」との指摘に反論の余地はなく、わが国にもNCAAのような全国の大学の運動部を統括する組織をつくり、GPA(Grade Point Average)などを参考に全国的学業成績評価基準を設け、成績の悪い学生には競技参加を制限できるようにすべきとの主張(友添 2006)に賛成したい。

3) セカンドキャリア

バブル経済の破綻は、日本型トップアスリート養成システムを崩壊させた(友添 2006)。企業の運動部の多くが休廃部を余儀なくされ、アスリートは正規社員としてではなく、数年契約のプロ選手として雇用されるのである。正規社員アスリートの数は減少を続け、一部のトップ選手のみが大学卒業後もアスリートとして活躍を許される状況である。その結果、スポーツ特待生として大量に入学したスポーツ学生のほとんどは、一般学生たちと同じ就職戦線をたたかい社会に出て行くことになるが、自分のセカンドキャリアを探求することになかなか時間を割けないスポーツ学生は、就職活動でも遅れをとりがちである。企業の多くも即戦力となる人材を求める傾向にあるから、ここでも資格の取得や専門教育に深く関わられなかったスポーツ学生は不利な立場に追い込まれる。最近の大学には、キャリア・サポートセンターなどの名称で、それまでの〈就職部〉の業務内容を強化した就職活動支援組織をもつところが増えてきた。このような組織の業務として、スポーツ学生を専門にサポートすることなどの対応が必要だろう。

4. おわりに

三浦しをん(2006)の小説『風が強く吹いている』は、十人しかいないほとんどが素人の大学陸上競技部が、一念発起箱根駅伝出場を果たすという、私からみれば到底ありえないと思える物語である。主人公の一人である「清瀬灰二」は、高校時代に長距離選手として活躍していたが、故障のため競技生活を中断していた。あるとき天才ランナー「蔵原走」との出会いによって、同じおんぼろアパート「竹青荘」の住人たちと箱根駅伝をめざすという設定である。「清瀬灰二」は選手と監督とマネージャーを兼任したような存在として、住人たちのモチベーションを高め、トレーニングメニューを立て、食事をつくり、箱根へと導いていくのである。住人たちは、ヘビースモーカー、漫画マニア、黒人留学生(陸上留学ではない普通

の留学生)、双子と多彩なメンバーだが、「清瀬灰二」の温かくもゆるぎのない情熱的なリーダーシップに牽引され、過酷なトレーニングと規則正しい生活の結果、とうとう箱根駅伝出場をはたすのである。

この作品には、現在の大学スポーツがかかえるいろいろな問題が描かれている。駅伝の、大学スポーツとしては異例の露出度ゆえの、ハードトレーニングによる故障、陸上留学生、国内エリート高校生のリクルート合戦などである。作者はこれらの問題に対して肯定も否定もしない。そのかわり、大学スポーツの理想たるべき象徴として「清瀬灰二」を登場させたのだと私は考えている。

全国の駅伝ファンの批判を恐れずにいえば、本稿で指摘した大学駅伝のさまざまな問題を一挙に解決するには、駅伝のテレビ中継を止めることが最善の策である。もしそれが可能になったとしても大学駅伝は消滅せず、それでも最後に残っているものが大学スポーツの本質なのではないだろうか。

5. 文献

- 友添秀則 (2006) 大学スポーツという問題. 友添秀則ほか編 現代スポーツ評論 14. 創文企画：東京、pp.6-15.
- 岡本純也 (2006) 大学運動部の問題. 友添秀則ほか編 現代スポーツ評論 14. 創文企画：東京、pp.36-46
- 玉木正之 (2006) 大学はスポーツを行う場ではない 体育会系運動部は解体されるべきである. 友添秀則ほか編 現代スポーツ評論 14. 創文企画：東京、pp.102-106.
- デレック・ボック：宮田由紀夫訳 (2004) 商業化する大学. 玉川大学出版部：東京.
- 生島淳 (2005) 駅伝がマラソンをダメにした. 光文社：東京.
- 三浦しをん (2006) 風が強く吹いている. 新潮社：東京.
- Daniels, J. (1998) Daniels' running formula. Human Kinetics : Campaign.